

八八艦隊海戦譜

死闘篇 2

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地図・図版 安達裕章
編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	東方の脅威	9
第二章	ベルリン炎上	33
第三章	艦隊集結	79
第四章	後背の敵	109
第五章	邀撃 ようげき の巨砲	167
第六章	崩れゆく戦線	241

西部太平洋要図

170°E

180°

170°W

160°W

40°N

30°N

10°N

0°

マーシャル諸島

メジロ環礁

オフ島

ハワイ島

真珠湾

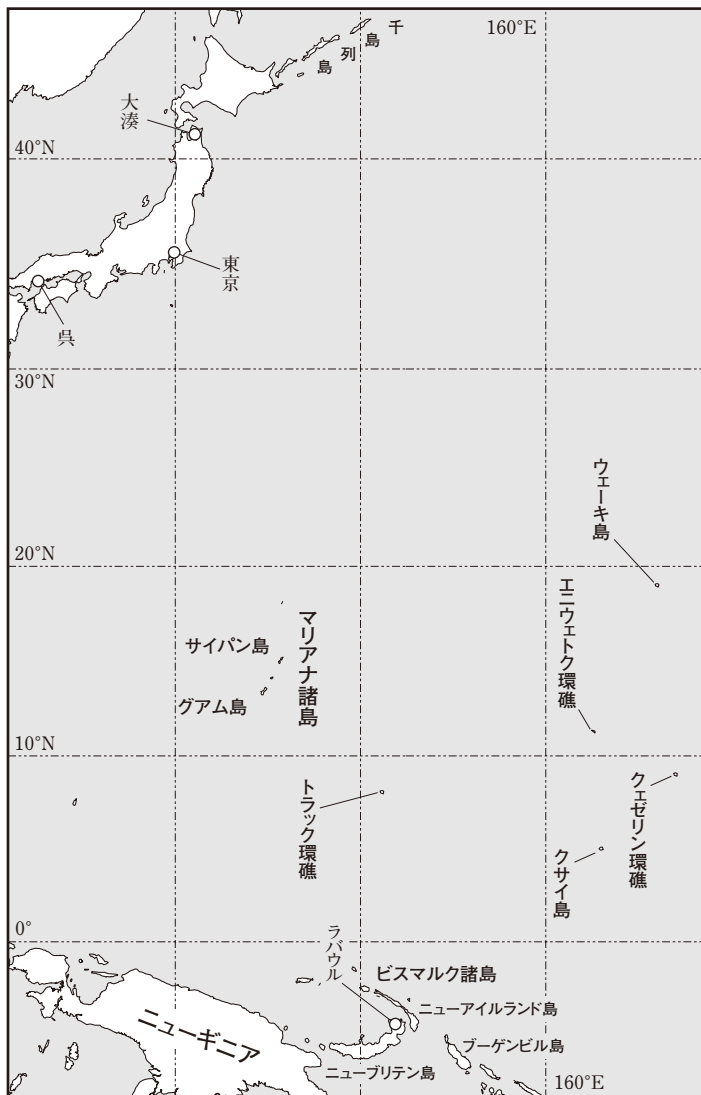
ハワイ諸島

170°E

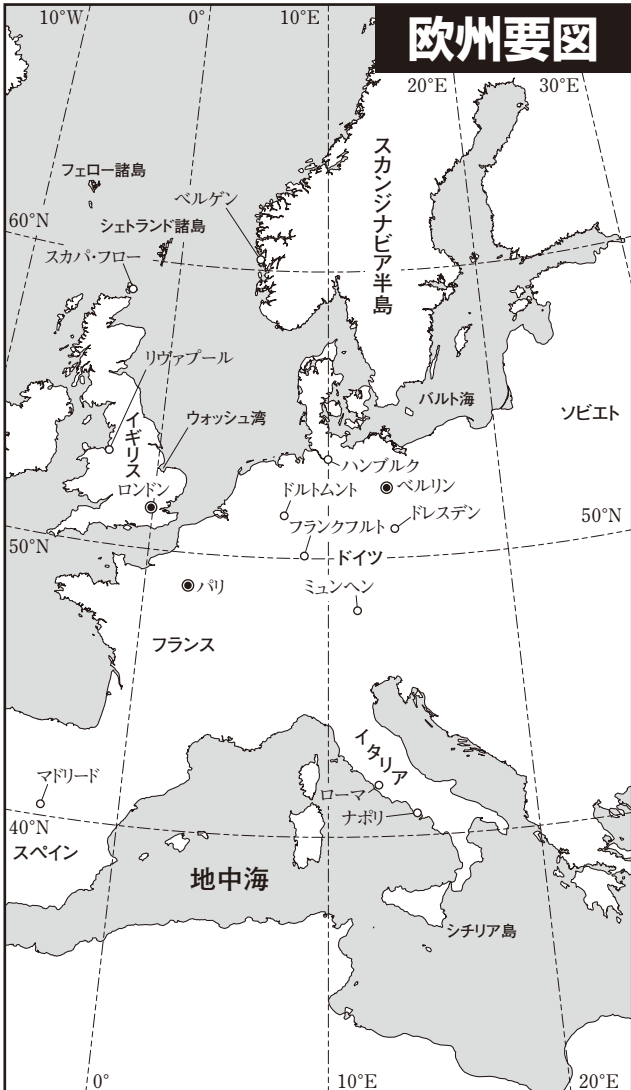
180°

170°W

160°W



欧州要図





八八艦隊海戦譜

—死闘篇 2—

第一章

東方の脅威

1

「来たか！」

柚木光彦^{ゆきのみつひこ}上等飛行兵曹は、正面上方を見て舌打ちした。

昇る朝日を背に、多数の黒い機影が見える。

少なめに見積もっても、五〇機はいる。緊急発進した零戦が二四機だから、こちらの倍以上だ。

しかも、高度上の優位は敵が占めて^しいる。

不利は目に見えていたが――。

（格闘戦に引き込む以外に活路はない）

柚木は、そう腹をくくった。

敵影は、みるみる拡大する。

スマートな零戦とは対照的な機体だ。胴体は見るからに太く、遅^{たぐま}しい。

グラマンF6F^グヘルキャット^グ。

五月二〇日、ラバウル上空の空中戦で初めて姿を

見せた、米海軍の新しい主力艦戦であろう。

柚木が所属する海軍第二八三航空隊の零戦搭乗員は、まだF6Fと戦ったことはないが、ラバウルの戦闘機隊は苦戦を強いられ、消耗が激しいとの情報^{じふ}が伝わっている。

その強敵が今日――昭和一八年九月二四日、マーシャル諸島クエゼリン環礁^{かんしょう}に出現したのだ。

（しかし、何故^{なぜ}F6Fが？）

その疑問が、ちらと浮かんた。

これまでマーシャル諸島に来襲した敵機は、米国領ウエーキ島を基地とするボーイングB17^グフライング・フォートレス^グだけだ。

F6Fを始めとする艦上機が、姿を見せたことはない。

にも関わらず、F6Fが出現したのは――。

それらの思考が巡ったのは一瞬だ。敵機は、間近に迫っている。

戦闘の火蓋^{ひふた}を切ったのは、米側だった。

先頭のF6Fが、両翼に赤い発射炎を閃かせ、後続機がそれに続いた。

零戦が装備する二〇ミリ機銃のそれとは、大きく異なる眺めだ。放たれるおびただしい火筋は、急所を貫かんとする長槍ではなく、敵を絡め取ろうとする投網を思わせる。

零戦は、次々と水平旋回や急降下をかける。右、あるいは左に旋回した零戦の翼端や、機首を押し下げた零戦の頭上を、敵弾がかすめる。

柚木は、急降下による回避を選んだ。

操縦桿を前方に押しこんだ直後、正面から殺到してきた敵弾が風防をかすめ、F6Fがぶちかましかける力士さながらの勢いで飛んで来た。

見るからに大きく、ごつい機体だ。細身の胴体に、薄刃のような主翼を持つ零戦とは、対照的だ。零戦が研ぎ上げられた日本刀とするなら、F6Fは大きく重い青竜刀か戦斧といったところだ。

その機体が二機、柚木機の真上を通過する。

新たなF6Fが二機、左前方から向かって来る。柚木は左の水平旋回をかけ、正面から敵機と対峙した。松上信忠一等飛行兵曹の二番機が、柚木に続いた。

零戦の小隊は三機編制だが、第二八三航空隊もB17との戦闘で消耗しており、定数を満たしていない中隊や小隊は珍しくない。柚木が率いる第三中隊の第三小隊も三番機を欠いており、松上との二機編制だ。

F6Fとの距離がみるみる詰まる。太く丸い機首が、目の前に迫る。

敵機の銃撃よりも早く、柚木は緩横転スローロールをかけた。

空が一八〇度回転し、背面飛行に転じた零戦の真下を、二機のF6Fが通過した。

機体はねじを巻くように旋回しながら、敵機の頭上を飛び越え、やり過ごす。前方にのめった敵機は、零戦に背後を取られ、後方から二〇ミリ弾を叩き込まれることになる。

柚木がブーゲンビル島のブインに展開していた頃、ロッキードP 38 ヲライトニング、やベルP 39 ヲエアラコブラ、に何度も用いた技だ。

敵機の後方に抜けたとき、風防ガラスに赤い光が反射した。

咄嗟に振り返った柚木の目に、火を噴いて空中をのたうつ松上機の姿が映った。

「しまった……！」

柚木の口から、痛恨の叫びが漏れた。

松上は柚木に倣い、緩横転をかけたものの、背面飛行になったところを別の敵機に撃たれたのだ。

しくじった。列機を墜とされた。ブーゲンビルから一緒に戦って来た、かけがえのない戦友を——そんな思いが、脳裏を渦巻いた。

松上の死を悼む余裕はない。背後から、敵機が迫りつつある。

柚木は唇を噛み締めつつ、操縦桿を左に倒した。

零戦が最も得意とする、水平面の旋回格闘戦だ。

F 6 F が喰らいついて来る。松上機を墜とした余勢を駆って、柚木機も喰うつもりだ。

「追って来い、追って来い」

柚木は、敵機に呼びかけた。

F 6 F は零戦より高速だが、速度性能に優る機体との戦闘は、P 38との戦闘で経験済みだ。

小笠原沖海戦でF 4 F を翻弄し、ブーゲンビル島を巡る攻防戦でP 38やP 39をきりきり舞いさせた旋回性能は、今なお敵機の追隨を許さない。

機体を大きく傾けた零戦が、一度、二度と旋回する。遠心力が全身を締め上げ、操縦桿を握る両腕やフットバーにかけた脚が鉛のように重い。

そろそろ敵の背後に回り込める頃か——と期待するが、彼我の距離はほとんど変わらない。

柚木機は、機銃の射線に捉えられることはないものの、柚木もまた敵機を振り切ったり、背後を取ったりすることができない。

「足りぬか！」

柚木は、操縦桿を更に倒した。

零戦が、ほとんど垂直に近い角度まで傾く。右の翼端が天を、左の翼端が地上を指す。

F6Fとの距離が、じりじりと縮まった。照準器の白い環わの中に、敵機の尾部が入って来た。

柚木機とF6Fは、ほとんど同時に水平に戻った。

柚木は、すかさず発射把柄はへいを握ったが、F6Fの加速が僅わずかかに早かった。

二〇ミリ弾の火箭は、F6Fの尾部を捉える寸前で弓なりのカーヴを描き、下方へと消える。

F6Fの機影は、みるみる遠くなって行く。

「畜生ちくしょう！」

柚木は、思わず罵声ばせいを漏らした。

敵の方が優速である以上、一旦逃げられたらどうしようもない。あのF6Fの搭乗員は、零戦との戦い方をよく知っているようだ。

取り逃がした敵機に、こたわる余裕はない。風防ガラスに、濃紺色の機体が映っている。

柚木は、操縦桿を大きく右に倒した。

急角度の水平旋回で、F6Fの突っ込みをかわし、素早く後方に回り込む。

照準器の白い環が、F6Fの尾部を捉える。距離は、三〇メートルも離れていない。必中の距離だ。

だが柚木は、発射把柄を握るよりも早く、再度の右旋回をかけた。

新たなF6Fが一機、後方から迫っていたのだ。

敵弾が柚木機の尾部をかすめ、虚空こくうへと消える。

気づくのが僅かでも遅れていたら、水平尾翼か垂直尾翼を吹き飛ばされていたところだ。

柚木は、零戦を垂直に近い角度まで倒し、F6Fの背後に回り込む。

敵機を照準器に捉えようとした瞬間、視界の左の隅に、F6F二機の機影が映った。

奔流はりゅうのような火箭が視界に入った瞬間、衝撃が柚木機を襲った。

四肢ししを引きちぎられるような凄まじい苦痛を感じ

た瞬間、零戦は空中分解を起こし、柚木の肉体は機外に放り出されていた。

意識が消失する寸前、柚木は、空から地上や海面に向けて伸びる、幾筋もの黒煙を見た。

どれが零戦のもので、どれがF6Fのものか、区別はつかなかった。

2

攻撃隊は、歓呼に迎えられて帰還した。

グラマンF6F「ヘルキャット」が、エンジン・スロットルを絞り込み、次々と着艦する。

開戦時の主力艦戦F4Fも、太い胴を持つ機体だったが、F6Fはそれ以上だ。コクピットの後ろから尾部にかけてのラインは、大きく盛り上がった力瘤ちからこぶを思わせる。

帰還機には、被弾の跡が目立つ機体が少なくない。エンジンを損傷したのか、今にも止まりそうに息

をついている機体もある。

パイロットには、帰還途中に自身で応急処置を施したのだろう、腕や足の付け根をマフラーできつく縛しばっている者や、顔面が血で染まっている者がいる。F6Fは、零戦ゼロに対して優勢に戦える機体ではあるが、圧倒的に有利というわけではない。

ジークは、F6Fを含めた合衆国の戦闘機にとって今なお侮り難い敵あたであることを、損傷機や負傷者の姿が物語っていた。

最終的に、第五八任務部T隊旗艦「エセックス」に帰還したF6Fは、二一機を数えた。

「通信より艦橋。『イントレピッド』より、F6F二三機収容との報告です」

『バンカー・ヒル』からも報告が入りました。帰還機は二〇機。再出撃不可の機体については、追って報告することです」

通信室からも、報告が上げられる。

「イントレピッド」「バンカー・ヒル」は、どちら

も「エセックス」の姉妹艦だ。

クエゼリン環礁に対する攻撃では、「エセックス」「イントレピッド」が環礁北端のルオット島を、「バンカー・ヒル」が南端のクエゼリン本島を、それぞれ担当している。

総出撃機数は、三隻を合わせて七五機であるから、一一機が未帰還となった計算だ。

攻撃隊の指揮官を務めたデヴィッド・カーン少佐と、通信室に詰めていた航空参謀ステイヴ・モンロー中佐が、「エセックス」の艦橋に上がってきた。「ルオットで交戦したジークは、二五機前後と推定されます。うち『エセックス』^F戦闘機⁶隊の撃墜機数は、一〇機と判断します。空中戦による撃墜の他、地上に対する機銃掃射も実施しました。二〇機以上を撃破したと判断します」

カーンは、きびきびとした口調で報告した。負傷しているにも関わらず、意気軒昂^{いきけんこう}な様子だった。

続けて、モンローが報告した。

「『イントレピッド』^F戦闘機⁷隊からは、撃墜一一機との報告が届いています。彼らは、地上攻撃までは実施しませんでした。VF6、7の報告を合わせれば、戦果は空中戦だけで二一機撃墜となります。また『バンカー・ヒル』^F戦闘機⁸隊は、クエゼリン本島上空で二〇機前後のジークと交戦し、撃墜一四機と報告しています」

「交戦したジークは、ほぼ一掃できたと考えて間違いないようですな」

満足げなTF58参謀長アーノルド・スコラン大佐に、司令官マーク・ミッチャー少将は、厳しい口調で言った。

「報告された数字を、額面通りに受け取ることはできない。機上からの、一瞬の判断だ。戦果の誤認や重複^{じふく}が起こりえる」

ミッチャーは、士官候補生の時代に航空を専門に選んだ、生え抜き^はの航空士官だ。

敏深く、老け顔^{しわ}の持ち主で、ヨーロッパの昔話に

登場する地の精を思わせる風貌だ。顔に似合わず、
 実戦指揮は剛毅果斷そのもので、「獯猛な地の精」
 という渾名がある。

日本海軍同様、大艦巨砲主義が幅を利かせている
 合衆国海軍にあつては非主流派に属するが、空母や
 航空機の運用に関しては、合衆国海軍でも右に出る
 者はないとの評価を受けている。

それだけに、航空戦の戦果は、他の指揮官よりも
 厳格に判定する傾向がある。

「しかし、だ」

ミッチャーの顔が、その一言と共にほころんだ。
 「VF6は地上攻撃を実施し、成果を収めている。

それだけの余裕があつたところから見て、全般的に
 は我が方が優勢に戦つたと判断できる。第二次攻撃
 の結果を見た上で、総合的に判断しなければならな
 いが、作戦成功と考えてよいだろう」

対日反攻のための準備攻撃を兼ねた、新鋭空母エ
 セックス級の実戦テスト。

それが、TF58の作戦目的だ。

対日開戦と同時に実施したトラック環礁に対する
 奇襲攻撃の失敗、それに続く硫黄島沖海戦（小笠原
 諸島沖海戦の米側公称）の敗北により、計り知れな
 い打撃を被つた太平洋艦隊だったが、開戦後三年
 近くを経て、ようやく対日反攻の準備が整つてきた。

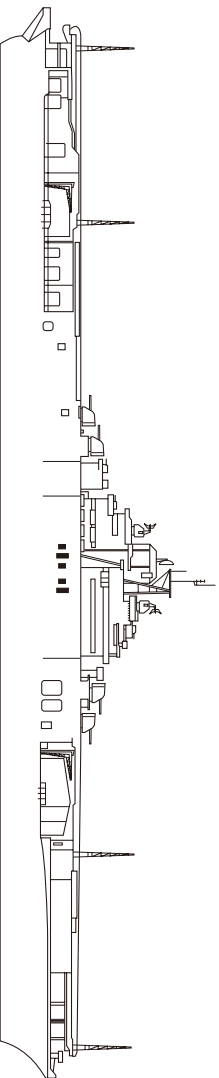
合衆国が世界に誇つてきたダニエルズ・プラン艦
 一六隻は、その多くが失われたが、それに替わる新
 たな主力艦が、次々と戦列に加わつたのだ。

ミシガン級の新鋭戦艦は、現在までに七隻が竣工
 しており、新たにミズーリ級と呼ばれる新鋭戦艦の
 配備も進められている。

ミシガン級七隻のうち、ネームシップの「ミシガ
 ン」は、昨年五月のショートランド島沖海戦（第三
 次ブルーゲンビル島沖海戦の米側公称）で沈んだが、六
 隻は健在だ。

合衆国海軍の新戦力は、それだけではない。
 脇役とはいえ、現代の海戦には欠かせない存在で

アメリカ海軍 エセックス級空母「エセックス」



全長	267.2m
最大幅	45.0m
基準排水量	27,100トン
主機出力	蒸気タービン 4基/4軸
速力	150,000馬力
兵装	33.0センチ
	12.7cm 38口径 連装両用砲 4基 8門
	12.7cm 38口径 単装砲 8門
	40mm 4連装機銃 8基 32門
	20mm 単装機銃 24丁
航空兵装	最大110機
乗員数	3,220名

ヨークタウン級の発展拡大版とされる新型空母。対日戦で得られた戦訓をもとに、より実戦に向けた設計が施された。

日本海軍が艦上爆撃機をもたないことから、水平防衛を重視せず、機関部直上の第一甲板のみ重装甲を施した。この思い切った設計には、実戦部隊から不安の声も上がったが、艦の軽量化に伴う高速化、鉄鋼資源の節約、建造期間の短縮などの利点があり、それを上回った。一方で、対空防御火器は強力なものが搭載され、レーダーを併用した最新の火器管制装置とも相まって、単艦で敵攻撃隊を撃退できると言われる。

本級は戦時の量産に適しており、制空権の確保という前線の要請に充分応え得る性能を持つが、米本国の建艦計画は戦艦が優先される傾向にあり、年間三〜四隻の建造に留まっている。

ある空母にも、新型のエセックス級が登場している。同級は、開戦時の主力空母だったヨークタウン級の拡大改良型で、全長二六七・二メートル、水線幅二八・四メートル、最大幅四五メートル、基準排水量二万七二〇〇トンと、ヨークタウン級より一回り大きい。

機関出力は一五万馬力、最高速度は三三ノットであるから、水上砲戦部隊に充分追従できる。

搭載機数は、艦上機隊の編制によつて上下するが、最大で一〇機を運用できる。

日本海軍の空母は、搭載機数三〇機前後の祥鳳ヒョウタイプ型と五〇機前後の飛鷹型ヒョウタイプばかりだから、エセックス級一隻で、シヨウホウ・タイプなら三隻、ヒョウ・タイプなら二隻に対抗可能だ。

同級は現在までに、一番艦「エセックス」、二番艦「イントレピッド」、三番艦「バンカー・ヒル」が就役し、実戦配備に就いている。

対日反攻作戦におけるエセックス級の主な役割は、

水上砲戦に際しての制空権奪取や上陸作戦時の支援だが、太平洋艦隊司令部は、従来とは異なった空母の使用法を考えているようだ。

今回のTF58の作戦は、そのためのテストケースであり、その標的として、マーシャル諸島のクエゼリン環礁が選ばれたのだった。

(このクラスを、多数建造していればな)

「エセックス」の飛行甲板を見つめながら、ミッチャーは考えを巡らしている。

エセックス級は、搭載機数、速力、対空火器の装備数、防御装甲等、全ての面で理想的な空母だが、艦のスペースに現れない長所がもう一つある。

工期が短く、戦時の大量建造に適していることだ。一番艦「エセックス」は、蘭印インドネシアが戦局の焦点となっていた一九四一年五月に起工され、一九四二年末に竣工した。

建造期間は、一年七ヶ月。ミシガン級戦艦やミズーリ級戦艦の半分以下だ。

兵器に求められる条件が「必要なものを、必要な時期に、必要な数だけ供給できること」であることを考えれば、理想的な艦と言える。

にも関わらず、エセックス級の建造数は、充分とは言えない。

四番艦「ホーネット（II）」（硫黄島沖海戦で沈んだ空母『ホーネット』の艦名を受け継いだもの）は間もなく竣工するが、五番艦以降の竣工は来年になる。「日本海軍には、新鋭戦艦をもって対抗する」

との基本方針を合衆国海軍が定めたこと、日本海軍の空母が搭載機数の少ない中小型艦ばかりであること、開戦前から就役しているヨークタウン級空母二隻と中型空母「ワスプ」も使用できることから、戦艦の建造が優先され、エセックス級は数が抑えられたのだ。

ミシガン級やミズーリ級の建造をもう少し削減し、その分の予算と資材を空母の建造や艦上機の量産に回していれば、エセックス級は来年半ばまでに一〇

隻前後を揃えられたらとうと、ミッチャーは考えている。

エセックス級一〇隻分の艦上機をもつてすれば、日本海軍が誇る八八艦隊エイト・エイト・フリートであれ、合衆国海軍が「モビー・ディック」の呼称を冠した新鋭戦艦——大和型ヤマトクラであれ、撃沈できる自信がミッチャーにはある。

そうなっていれば、かねてから論争的になっていた「航空機は戦艦に勝利し得るか否か」という命題に回答を出せていただけではなく、戦闘に伴う犠牲も、遥かに少なく済んだはずだ。

だが現実には、大艦巨砲主義が合衆国海軍の戦術思想の根幹こんかんを成している。

当面は、手持ちの空母を最大限に活用して、勝利に貢献すること。

具体的な戦果によって、空母と航空機の有用性を、地道に実証してゆくこと。

それが、ミッチャーの果たすべき役割だった。

——第一次攻撃隊の帰還から三〇分ほどが経過したとき、「エセックス」の通信室に、新たな入電があった。

第一次攻撃隊の帰還前に、クエゼリンに向けて出撃させた、第二次攻撃隊の報告だ。

「ルオット上空に敵機なし。地上攻撃に移行する」

「現在、クエゼリン本島の上空。我を迎え撃つジーク一〇機前後。今より掃討にかかると」

「……どうやら、第一次攻撃で勝敗は決していたようだ」

前後して上げられた二つの報告を聞いて、ミッチャーは微笑した。

事前情報によれば、クエゼリンの日本軍は、ウェーキ島に展開するB17部隊との戦闘で消耗を強いられている。日本本土から遠いこともあって、補給や増援も途切れがちだ。

TF58の攻撃は、疲弊^{ひへい}していた部隊に止めを刺す^{とど}ようなものだったのかもしれない。

「艦砲射撃に移行しますか？」

スコランがミッチャーに聞いた。

TF58は、空母の護衛と対地射撃用に、巡洋艦四隻を伴っている。この四隻をもって艦砲射撃を加えれば、クエゼリンの日本軍基地に、当分再建が不可能なほどの大打撃を与えられる。

「……いや、艦砲は使わない。航空機による第三次攻撃を実施する」

少し考え、ミッチャーは返答した。

TF58の空母三隻は、艦隊の上空直衛を主目的にしているため、搭載機の半数以上をF6Fで固めているが、爆撃と対潜^{しょうかい}哨戒用に、ダグラスSBD^ドイントレス^グ二〇機とグラマンTBF^グアベンジャー^グ一二機^ズつを搭載している。

これらを投入し、クエゼリンの日本軍基地を叩き潰すと決めた。

「クエゼリンの基地ぐらい、航空攻撃だけで壊滅させることができなければ、予定されている対日反攻

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。